

9月9日(土) 研究発表3 第5室(2114)

分野: Testing, Curriculum

DIALANG による日本人大学1年生英語力の CEFR レベル

CEFR Levels of Japanese First-Year University Students' English Ability Through DIALANG

斉田 智里 (茨城大学)

目的と方法

「Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR)」は、ヨーロッパの言語教育に共通の基準を提供するものである (Council of Europe, 2001)。言語運用能力が6つの参照レベル(A1, A2, B1, B2, C1, C2)で段階的に規定され、各レベルで学習者の「できること (Can do)」が記述されている。A「基礎段階の言語使用者」、B「自立した言語使用者」、C「熟達した言語使用者」である。CEFRの共通参照レベルは日本の英語教育においても参考になることが多い。しかし、ヨーロッパとは全く異なる日本の言語環境においてCEFRを導入しようとする場合、その適用可能性について十分な検討が必要であると思われる。

ところで、DIALANG という大規模な外国語能力診断テスト(14ヶ国語)が開発された (Alderson, 2005)。DIALANG は CEFR に基づいている。学習者は、インターネット上で①Vocabulary Size Test, ②Self-assessment, ③Language Testの3部門の回答を通して、advisory feedbackを受ける。①Vocabulary Size Testは75問のYes/NoテストでPlacement Testの役割を果たす。②Self-assessmentはListening, Reading, Writingの3つの領域におけるCan do statementsに基づく学習者の自己診断である。③Language Testには、Reading, Listening, Writing, Vocabulary and Structuresの5つの領域があり、学習者の言語能力が領域別にCEFRの6つのレベルで診断される。

日本の大学英語教育にCEFRの導入を検討する際、どの共通参照レベルを到達目標にしたらよいかの実現可能性との関係で課題となる。その手がかりを得るために、日本人大学1年生に対してDIALANGを実施し、CEFRの到達可能な共通参照レベルを検討した。

結果と考察

DIALANGのウェブサイト(www.dialang.org)からシステムをダウンロードし、大学1年生121名に実施した。5つのLanguage Testsのうち、1つでも回答した学生のレベルを図1にまとめた。回答者数は、Listening 111名、Writing 110名、Reading 100名、Structure 107名、Vocabulary 113名であった。2/3の回答者がListeningはA1, ReadingとWritingはA1~A2, StructureやVocabularyはA2~B1レベルであることがわかった。

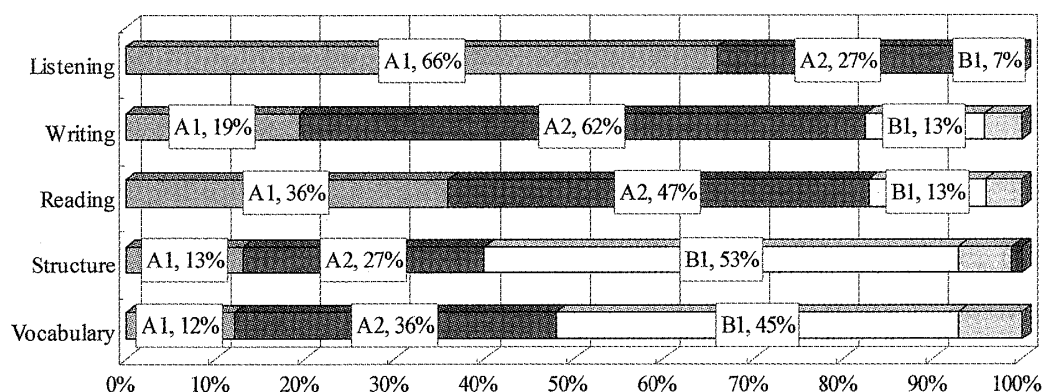


図1 5つの言語テスト領域におけるCEFR共通参照レベル別の人数比

分野: Testing, Curriculum

Self-assessment と Language test の両方に回答した人数は, Listening で 61 名, Writing で 59 名, Reading で 60 名であった。Self-assessment と Language test のレベルとが一致していた割合は, 3 つの領域でいずれも約 60%であった。過大評価は約 20%, 過少評価は約 10%であった。Reading 能力を過小評価する割合が他に比べやや多かった。

5 つのテストにすべて回答した人数は 82 名であった。クラスタ分析の結果, 3 つのクラスタを得た。第 1 クラスタには 41 名, 第 2 クラスタには 14 名, 第 3 クラスタには 27 名の調査対象が含まれていた。 χ^2 検定を行ったところ, 有意な人数比率の偏りが見られた($\chi^2=13.34$, $df=2$, $p<.001$)。

次に, 得られた 3 つのクラスターを独立変数, 「Listening Level」「Reading Level」「Writing Level」「Vocabulary Level」「Structure Level」を従属変数とした分散分析を行った。その結果, 5 つの領域ともに有意な群間差が見られた。結果を図 2 に示した(A1=1, A2=2, B1=3, B2=4, C1=5)。第 1 クラスターは, Listening, Reading, Writing の到達度レベルは A1 と低いが, 語彙や文法の到達度レベルは B1 と高いので, 「知識偏重・運用不足型」とした。第 2 クラスターは, Listening の A1 を除き他の 4 領域ではいずれも B1 に近くバランスが取れているため, 「知識・運用バランス型」とした。第 3 クラスターは, 5 つの領域とも A1 レベルであるため, 「知識不足・運用不足型」とした。「知識偏重・運用不足型」に属する学生数は回答者の半分以上と最も多く, 次いで「知識不足・運用不足型」が 3 分の 1, 「知識・運用バランス型」は全体の 5 分の 1 以下であった。「知識不足・運用偏重」という学生は, 今回の調査では見られなかった。いずれのクラスターにおいても, Listening の到達レベルが A1 と低いのが特徴であった。

日本の大学英語教育に CEFR を適用する場合には, 学生の言語能力パターンの特徴に応じて, 領域別に個々の到達レベルを設定する工夫がより現実的であることが示唆された。

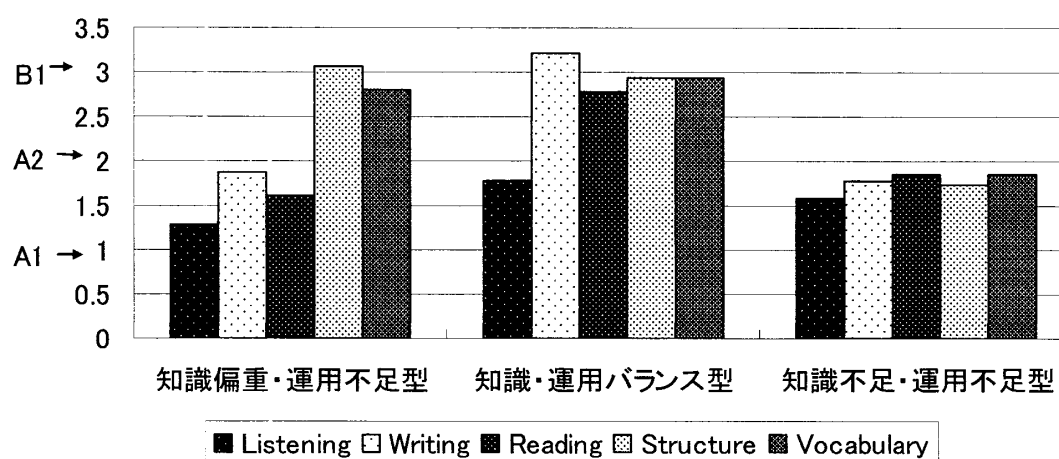


図 2 クラスター分析結果: 3 つのタイプの学習者集団と各言語領域の CEFR レベル

引用文献

- Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Alderson, J. C. (2005). *Diagnosing Foreign Language Proficiency. The Interface between Learning and Assessment*. New York: Continuum.